

リポート

# こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.3 / 「私たち」意識が醸成されていく

宮里暁美



開園から半年がたちました。すべてが初めてという中で懸命に過ごすうちに、次第にこども園の中に「私たち」という意識が生まれ、広がってきているように感じます。

「私たち」を形作っているのは、子どもと保護者、職員たちです。そして私たちの周りにいる多くの方々との出会いにより、豊かさがもたらされています。この夏の出来事を三つ紹介します。それはまさに、今ここで紡がれている物語です。

## みんなで創り上げた夏祭り

開園前、準備室のメンバーで年間行事を考え合いました。子どもたちにとって必要なことかどうかが選択の基準で、その中の一つに夏祭りがありました。計画に入れたとしても、どのようなお祭りにするのかという確かな像があったわけではありません。皆で創り上げることが重要だという思いから、計画段階では漠然とした状態にとどめていました。

宮里暁美（みやさとあけみ）

お茶の水女子大学附属幼稚園副園長、十文字学園女子大学教授を経て、文京区立お茶の水女子大学こども園設立後、園長に就任。

六月末、祭りの企画を考え合う時期になりました。保護者からもプランを寄せてもらおう、という声が上がリ、小さな「アイデアBOX」を出してみました。あまり期待せず、とりあえずちよつと出してみた、という感じでした。ところが、数日後、ステキな企画書が何通も入っていたのです。以前の園で経験したことを基にした企画や、子どもたちになぜひ豊かな体験をといて願いが寄せられていました。それらの声を聞きながら、子どもも大人も自分らしさを発揮しつつ楽しさを一緒に創り上げることも園になってきたということを実感しました。

職員の中からも、やりたいことが続々と出てきました。それぞれの特技を惜しみなく発揮することで、「ダンゴムシ音頭」や法被が作られていきました。保護者ボランティアも募集し、祭りのお面や魚釣りの魚、みこしの土台を作りました。そのような作業をしているときの保護者の手際の良さは、格別でした。

七月二十三日、祭り当日。土曜日は大学の南門が閉まっているため、南門付近にこども園専用の広場ができ、そこにお店を出しました。集いの場所も作り、マジックショーや歌を楽しんだりしました。大学附属幼稚園の先生方もお店の担い手として祭りを一緒に盛り上げてくれました。人のにぎわいと子どもたちの喜びが重なり、うれしい時間が生まれました。祭りを創るということは、大きな力になるのだということを、実感したのでした。



▲幼稚園の先生たちのお店が大人気。  
七輪で煎餅を焼く。「おいしいよ!」

「ライフ×アート展」への参加  
— 感じる・あらわす体験 —

お茶の水女子大学関係者によるアート実証研究会

第3回 お茶の水女子大学

## ライフ×アート展

2016年 8月2日(金)→4日(日) 11:00～18:00 最終日は15:00まで

【入場無料】 8月2日 15:00～ トークイベントを予定しております。

主催：お茶の水女子大学 アート実証研究会

共催：SCECA（乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業）

協賛：お茶の水女子大学 附属幼稚園

協賛：お茶の水女子大学 附属小学校

協賛：お茶の水女子大学 附属中学校

協賛：お茶の水女子大学 附属高等学校

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学

協賛：お茶の水女子大学 附属大学



「ライフ×アート展」  
とは、アート・美術  
教育実践にかかわる  
お茶の水女子大学附  
属校関係者が展開  
するアートプロジェ  
クトです。人のライ  
フ（生・生活・人生）  
に生まれるアートを、  
さまざまな角度から

捉え、展示し、表現する展覧会です。

こども園では、作品の展示と、アート展に  
出掛け、体験する、という参加をしました。

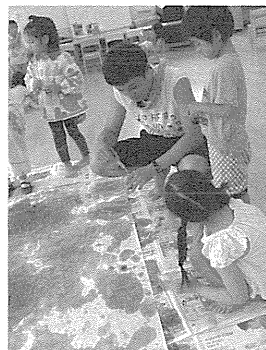
作品製作では、アートの専門家瀧田節子先  
生に保育に加わっていただき、スポイトア  
ー  
トや藍の叩き染めを伝授してもらいました。  
瀧田先生からは、保育者が子どもと同じよう

に色の美しさに  
驚き、喜ぶことの  
大切さに気付か  
せていただいた  
ように思います。  
私たちの生活の  
中にある「美」  
や「不思議」に  
驚く生活、喜ぶ  
生活、それを重  
ねていきたいと  
強く思いました。

アート展当日は、郡司明子先生による「夏  
色タープ」というワークショップがあり、三  
歳、四歳の子どもたちが体験しました。フワ  
フワとした柔らかく美しい紙を手に取り体  
で遊ぶことから始まり、遊ぶ体験を十分にし  
た後に、それを薄い大きな紙にスプレーを吹  
き付けて貼っていききました。「表現とは遊ぶこ  
と」なのだ、ということがよくわかる体験で、



▲「夏色タープを作ろう！」



▲4歳児スポイトアート

伸びやかな表現を生み出す重要なポイントを学ぶ機会となりました。

大学の新しい学生会館で行われたアート展の入り口には、ローズマリーが巻き付いたオブジェが展示されていました。大学内のハーブ園の朝採りハーブです。オブジェの中をくぐり、手で触れると、香りが子どもたちを包みましました。この体験は子どもたちの心に深く残ったようで、後日同じ場所を訪れたとき、ある子が「ここにハーブ園があったんだよね」と言いました。ハーブのオブジェにハーブ園を見る子どもたちの感性が素敵だと感じました。



▲香りに包まれて

アート展の会場に足を踏み入れた子どもたちは、次々に動きだしました。ボールに突進する子ども。紙コップを崩していく子ども。次々湧き起こる子どもたちの

動きに「おおお」と思いつつ見回すと、会場内にいる

いろいろな大人がそれぞれのやり方で子どもたちに応じている姿が見えてきました。

湧き起こる子どもの動きに応じる大人の動きがあつて、子どもの動きに意味が与えられ、そこに豊かで新しい空間が創り出されていく。これがまさにライフ×アートなのではないかと思いました。

八月四日、展示品を撤収し、それらをそのまま園内に飾ることにしました。園の生活とのつながりをつけたいと願ったからです。そうして飾っていると、保護者から「ライフ×アート展、行きたかったんですよ」と声を掛けられました。お知らせを配っていたので関心を寄せてくれていたようでした。関心はあっても時間がなくて行くことができなかった



▲鏡に映る自分とダンス！



▲玄関に写真を掲示



▲園舎が美術館に变身

保護者の「見たかった」という思いに応えることができて、本当によかったと思いました。

「参加できる方はどうぞ」という誘い方をしたときに、「本当は参加したかった」という思いを大

事に受けとめてつないでいくことが大切なのだと感じました。多様な在り方を認めつつ豊かな時間を共に味わうために……。

## 「ワクワクデー」という可能性

こども園の課題としてよく挙がるのが、多様な保護者が違いを乗り越えて親しくなっていくことの困難さです。こども園で過ごす時

間に長短があっても、子どもたちは確実に重なる時間があり、違いを乗り越えて親しくなっていくことは、それほど難しくはないと思われます。しかし保護者は、送迎の時間が違うと顔を合わせることができず、親しくなるチャンスが得にくいのです。子どもたちが育つ保育の場は、保護者の理解と協力なしには成り立ちません。バラバラな存在としての保護者ではなく、心がつながっている保護者たちになることが必要だと思いました。

ではどうしたら？ と考えたときに出てきたのが、「ワクワクデー」というアイデアでした。土曜日のキャンパス内を活用し、自由参加の親子活動を提案してみようと考えたのです。楽しさでつながる、ワクワクでつながろう、と考えたのです。年間六回開催。企画は園長が担当し、ボランティアによって運営。土曜日保育の子どもや保育者は参加しますが、他の職員の出勤は求めないことにしました。平日の勤務を守るためです。



▲第一回 「ダンゴムシいるかな？」

六月に第一回を開催。

五十組近くの親子が参加。

子どもたちが大好きなダン

ゴムシをテーマとし、

日本ダンゴムシ協会会長

を招き、ダンゴムシを見

つけたりレースをしたり

して遊びました。子ども

と保護者が同じようにダ

ンゴムシに見入る時間がありました。ダンゴ

ムシレースは大人が夢中になり、笑い声が響

き合う会になりました。

八月末、第二回を開催。約三十組の親子が

参加。晩夏のキャンプスに出掛け、思い切り

虫捕りをしました。ゲストの日本昆虫協会の

方と一緒に虫捕りは、大人の心に火を付

けたようです。感想を紹介します。

○子どもと楽しもうと思っていましたが、自

分のほうが夢中になって子どもが先に帰っ

てしまいました。

○久しぶりの虫捕りは楽しかったです。始め

る前は少し虫が怖かったですが、いざ始め

るとそういう感情を忘れて夢中でした。

○普段はあまり意識していませんでしたが、

意外に多くの虫がいることに気付く機会に

なりました。とても楽しい時間でした。

誰もがかつては子どもだった、という言葉

があります。保護者の中にある「子ども心」

に火が付くと、保

護者同士の距離が

急に近くなるよう

に感じます。心が

開放されるからで

しょうか。「大人

が夢中になる！」

をテーマに、ワクワク

デーという可能

性を追究していき

たいと思います。



▲第二回 虫網を持って集合